山口県教育会現職研修奨励事業助成

令和３年度　個人研修概要
「国語科における中高連携した深い学びのある授業づくり」

山口県立高森みどり中学校　廣中　淳

はじめに

本年度から中学校においては新学習指導要領が全面実施された。高等学校においては来年度からの年次進行での実施となる。国語科の目標は「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に(的確に)理解し適切に(効果的に)表現する資質・能力を育成する」こととしている(※括弧内は高校の目標)。「言葉による見方・考え方」は国語科が言語の教育であることの立場を、「言語活動を通して」は学習過程を明確に表している。その学習過程の中では「深い学び」のある授業が求められている。そこで問題となるのが「深い学び」である。「深い学び」とは、一体どのような「学び」であろうか。指導要領解説国語編には、「様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている」とある。つまり、生徒が言葉そのものについて深く考えている授業が国語科の「深い学び」であるといえる。したがって、「話すこと・聞くこと」「読むこと」「書くこと」を通して言葉について深く考える授業の構築をめざし実践に取り組んだ。

本校は併設型中高一貫教育校であるため、中学３年生と高校１年生の授業を担当している。幸いにも昨年度担当した中学３年生が高校へ進学し、そのまま国語総合(現代文)を担当することとなった。本稿において生徒が言葉について深く考える授業について述べることとする。

1　立ち止まって考えさせる発問が鍵となる

生徒が深く考えるためには、生徒に深く考えさせるような問いを準備しなければならない。または、あらかじめ準備していなくても学習過程の中で、生徒が一生懸命取り組んでいるうちに問いが生まれてくるような場づくりがなされなければ、深く考えることなく一方通行的な学びが続くことであろう。知識注入型の授業を否定するわけではないが、生徒が考える主体とならなければ、新学習指導要領で求められている資質・能力を育むことは難しいと考える。

(1)高校詩教材の実践例　「小景異情」室生犀星

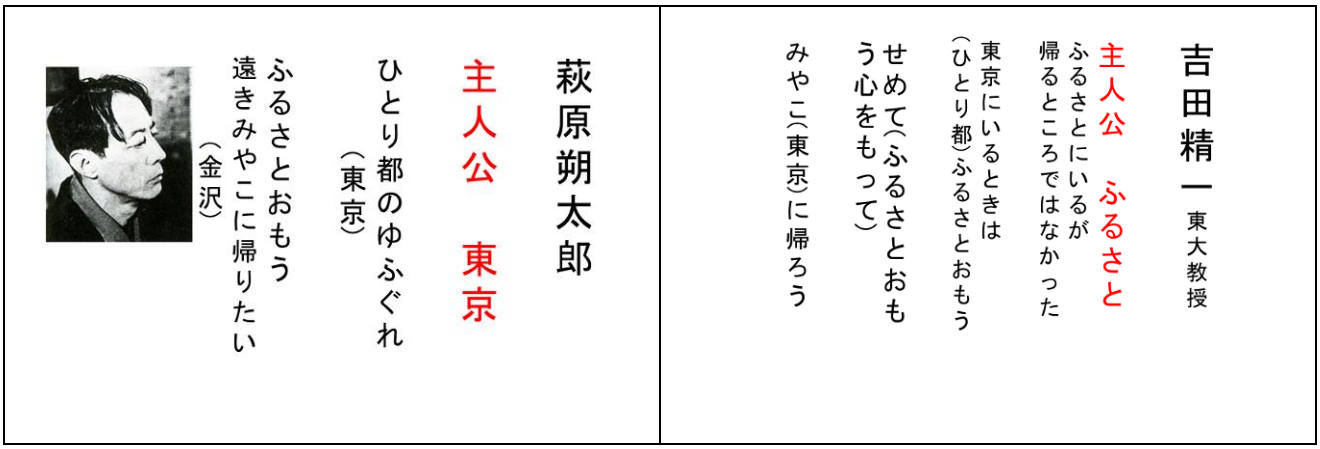
高校の実践として「小景異情」を紹介したい。詩作品としても詩教材としても大変有名な作品であるが、現代の高校生にとっては古典といってもよいぐらいの距離感があり、ほとんど知られていない作品である。

小景異情　　室生犀星

ふるさとは遠きにありて思ふもの／そして悲しくうたふもの
よしや／うらぶれて異土の乞食となるとても／帰るところにあるまじや
ひとり都のゆふぐれに／ふるさとおもひ涙ぐむ／そのこころもて
遠きみやこにかへらばや／遠きみやこにかへらばや

解釈の違いを提示してテーマを考えさせる

教科書(「国語総合現代文編」東京書籍)の「学習の手引き」の問いに「この詩の中で、作者はどこにいると考えられるか。また、それはどの部分からわかるか」という問いが掲載してある。「小景異情」を教材としたときの大変ポピュラーな発問である。ただし、生徒たちの自由な発想のみでは難しい面がある。そこで代表的な解釈を提示し、その解釈の違いから何がかわってくるのか発問した。以下はその際に提示し説明したスライドである。



このように考えるポイントを示し、焦点化を図ることによって生徒はぐっと本気で考えるようになった。つまり、詩の世界の作者(主人公)の居場所を具体的に提示することによって「望郷の念」と「故郷との決別」というテーマの違いを生徒自らが見いだすことができたのである。もちろん最終的に萩原解釈と吉田解釈のどちらを支持するかは本人の好みである。

以下、生徒が「振り返りシート」に記述した文章を紹介したい。

○この詩の中の「都」「みやこ」はどちらも東京であり、「都」はふるさとに対して筆者が懐かしみ思い出にひたっているときの東京、「みやこ」はふるさとはもう帰るべきではないと思い、その思いを抱きながら帰るときの東京である。ふるさとを懐かしみながらもふるさとと決別していることがテーマとなっている。(生徒Ａ)

○主人公は東京にいてふるさとに帰りたいという願いと、本当に帰るべきなのか、という真逆の思いの中でもどかしさや悲しさを感じていると思う。主人公も簡単ではない思いを向けているように「ふるさとへの思い」がテーマになっていると思う。(生徒Ｂ)

生徒Ａは二つの解釈を理解したうえのしっかりと考えた記述となっており、生徒Ｂは解釈をふまえたうえで対立感情が併存する人間のもどかしさにふれており、深く考えた記述になっている。

(2) 中学詩教材の実践例　「岩が」吉野　弘

中学の実践として、同じく詩教材「岩が」を紹介する。

岩が　　吉野　弘

岩が　しぶきをあげ／流れに逆らっていた。／岩の横を　川上へ／

強靭な尾を持った魚が　力強く／ひっそりと　泳いですぎた。／

逆らうにしても／それぞれに特有な／そして精いっぱいな／仕方があるもの。

魚が岩を憐れんだり／岩が魚を卑しめたりしないのが／いかにも爽やかだ。

流れは豊かに／むしろ　卑屈なものたちを／押し流していた。

詩の言葉の隠れた意味を探らせる

この詩のポエジーは隠喩の中にある。生徒たちが詩の中にある隠れた意味を探り考えることが深い学びになると考えた。詩の中の言葉一つ一つに隠された意味を生徒と対話しながら丁寧にまとめていく。そして、「詩の中の言葉に作者のどのようなものの見方があらわれていますか」と問うてみた。生徒たちは周囲の友達と対話を繰り返しながら以下のような考えを見いだした。

以下、生徒が「振り返りシート」に記述した文章を紹介する。

○ひっそりと目立たず逆らう魚は、人間社会の中で流れに逆らっている人と同じような立場にあり、その逆らい方は自由というのが作者のものの見方だと思う。(生徒Ａ)

○詩の言葉には逆らうことをあきらめて、ただ押し流されてしまうのではなく、精一杯自分のやり方で頑張るべきだという見方があると思います。(生徒Ｂ)

○世の中の人の生き方の仕組みを表現していて、岩や魚も同じような生き方をしているという見方をしている。(生徒Ｃ)

生徒たちの記述には、川の中の魚や岩のことを表現しながらも、人間社会を映し出していることを捉えることができている。

２　言葉についての発見がある対話を仕組む

「三人寄れば文殊の知恵」という諺があるが、生徒一人では、どんなに頑張って考えても限界がある。つまり、授業の中で自分とは見方・考え方の違う他者と交流することを通して、生徒は新たな視点や発想を得るのである。

(1) 中学古典教材の実践例　「奥の細道」松尾芭蕉

推敲過程から言葉の効果を探らせる

松尾芭蕉が立石寺を訪れた章段の学習場面を紹介する。

「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」

有名な一句であるが、芭蕉が「奥の細道」にこの俳句を残すまで推敲を重ねたことはだれも知らない。そこで、推敲の過程を提示し、何がどう違うのか、生徒たちに問うてみたのである。芭蕉はＡＢＣの順に推敲を重ねている。

Ａ　山寺や石にしみつく蝉の声

Ｂ　さびしさや岩にしみ込む蝉の声

Ｃ　閑かさや岩にしみ入る蝉の声

男子生徒が「山寺とすると景色がはっきりとうかんでくる」と発言した。その発言から具体的な場所を述べることが逆に想像の幅を狭めてしまうことに生徒たちは気づいた。また、「さび

しさとすると孤独な主人公が浮かび上がりすぎてしまう」という発言から芭蕉は孤独感を表したいのではないと見いだした。中七の「しみつく・しみ込む・しみ入る」については蝉の声の浸透の度合いが「しみ入る」が一番よいという意見に収束した。

このように教師は問いを発したら生徒の対話が質の高い対話となるように場を仕切っていくことが大切なのである。

(2)高校随筆教材の実践例　「蝉と日本語」小池昌代

オノマトペを題材に物音や声を表現しようとすると使用している言語空間に閉じ込められてしまうという表現者の苦悩を述べたエッセイである。そこで、各国の様々なオノマトペを調べるという言語活動を設定して取り組んだ。その活動を通して、世界の様々な言語に関心をもつとともに日本語の豊かさを感じ取っていった。生徒たちが着目した視点は以下の通りである。

① 動物等の鳴き声　②雨、風などの自然の音　③自動車や汽車などの乗り物の音
④　痛みを表すオノマトペ　⑤ドアをノックするオノマトペ　　⑥各国のオノマトペの数
⑦　くしゃみを表すオノマトペ

生徒は調べていく過程の中で、様々な意見を交わし合い、そのような活動を通して言葉への自覚を高めていくことができたようである。

調査内容はグループ内で発表し、おもしろい視点がある調査内容は全体の場で発表させた。

３　考察（まとめ）

「深い学び」のある授業づくりのためには以下の三つを大切にしたい。

深い教材研究が必要

生徒たちが深く考えるためには、教師が教材について深く考えていなければ深まるはずはない。そのための教材研究をしっかりしていく必要がある。ただし自分の教材研究を生徒に押しつけてはいけない。教材内容を知らせることが国語の学びではないからだ。

発問を軸にした授業展開

言葉の知識の獲得や教師によるわかりやすい説明が大切なことは言うまでもないが、生徒の中に問いが生まれ、その問いを解明する中で言葉の働きに気づくことは「深い学び」のある授業といえるだろう。したがって、「深い学び」へ誘うための発問研究は大変大切なことだと思う。

言葉の働きについて発見のある対話

対話をするだけでは「深い学び」とはならない。その対話が言葉の働きの発見につながるものかどうか、が重要である。教師は言葉に着目した生徒の対話を引き出し、生徒同士の発言をつなぎ価値づけていくことをしなければならない。

４　終わりに

毎年、年の瀬になると「今年の漢字」が発表される。生徒たちに一年を振り返って、その年の世相にふさわしい漢字一文字を書かせている。生徒の選んだ漢字が「今年の漢字」になると大変喜んでいる。「深い学び」の基盤となるのは日常生活の中で言葉の関心を高めていくことだと思っている。本校では、中学校と高校の二つの授業を担当するという貴重な体験ができる。ぜひ、この体験を今後も授業づくりにいかしたいと考えている。